

心中

森鷗外

青空文庫

お金^{きん}がどの客にも一度はきつとする話であった。どうかして間違つて二度話し掛けて、その客に「ひゆうひゆうと云うのだろう」なんぞと、先^{せん}を越して云われようものなら、お金の悔やしがりようは一通りではない。なぜと云うに、あの女は一度来た客を忘れると云うことはないと云つて、ひどく自分の記憶を恃^{たの}んでいたからである。

それを客の方から頼んで二度話して貰つたものは、恐らくは僕一人であろう。それは好く聞いて覚えて置いて、いつか書こうと思つたからである。

お金はあの頃いくつ位だったかしら。「おばさん、今晚は」な

んと云うと、「まあ、あんまり可哀そうじゃありませんか」と真面目に云つて、救を求めるように一座を見渡したものだ。「おい、万年新造しんぞ」と云うと、「でも新造だけは難ありがた有がたいわねえ」と云つて、心しんから嬉しいのを隠し切れなかつたようである。とにかく三十は慥たしかに越こしていた。

僕は思い出しても可笑おかしくなる。お金は妙な癖のある奴だつた。妙な癖だとは思しいながら、あいつのいないところで、その癖をはつきり思い浮かべて見ようとしても、どうも分からなかつた。しかし度々見るうちに、僕はとうとう覚えてしまった。お金を知っている人は沢山あるが、こんな事をはつきり覚えているのは、これも矢つ張僕一人かも知れない。癖と云うのはこうである。

お金は客の前へ出ると、なんだか一寸ちよつと坐わつても直ぐに又立たなくてはならないと云うような、落ち着かない坐わりようをする。それが随分長く坐わっている時でもそうである。そしてその客の親疎によつて、「あなた大層お見限りで」とか、「どうなすつたの、鼬いたちの道はひどいわ」とか云いながら、左の手で右の袂たもとを撮つまんで前に投げ出す。その手を吭のどの下に持つて行つて襟えりを直す。直すかと思うと、その手を下へ引くのだが、その引きようが面白い。手が下まで下りて来る途中で、左の乳房を押えるような運動をする。さて下りたかと思うと、その手が直ぐに又上がつて、手の甲が上になつて、鼻の下を右から左へ横に通リ掛かつて、途中で留まつて、口を掩おおうような恰好になる。手をこう云う位置に置

いて、いつでも何かしやべり続けるのである。尤も乳房を押えるような運動は、折々右の手ですることもある。その時は押えられないのが右の乳房である。

僕はお金が話したままをそっくりここに書こうと思う。頃このごろ日僕僕の書く物の総ては、神聖なる評論壇が、「上手な落語のようだ」と云う紋切形の一言で褒めてくれることになっているが、若し今度も同じマンション・オノレエルを頂戴したら、それをそっくりお金にお祝儀に遣れば好いことになる。

*

*

*

話は川^{かわ}栴^{ます}と云う料理店での出来事である。但しこの料理店の名は遠慮して、わざと嘘の名を書いたのだから、そのお積りに願いたい。

そこで川栴には、この話のあつた頃、女中が十四五人いた。それが二十畳敷の二階に、目刺^{めざし}を並べたように寝ることになつていた。まだ七十近い先代の主人が生きていて、隠居^{しんご}為事にと云うわけでもあるまいが、毎朝五時が打つと二階へ上がつて来て、寝ている女中の布団を片^{かた}端^{っぽし}からまくつて歩いた。朝起は勤勉の第一要件である。お爺いさんのする事は至つて殊勝なようであるが、女中達は一向敬服していなかつた。そればかりではない。女中達はお爺いさんを、蔭^{すけ}で助兵衛^{べえ}爺^{じい}さんと呼んでいた。これはお爺い

さんが為めにする所あつて布団をまくるのだと思つて附けた渾名あだなである。そしてそれが全くの冤罪えんざいでもなかつたらしい。

暮に押し詰まつて、毎晩のように忘年会の大一座があつて、女中達は目の廻るように忙しい頃せわの事であつた。或る晩例の目刺の一疋びきになつて寝ているお金が、夜なかにふいと目を醒さました。外の女ならこんな時手ちようず水にでも起きるのだが、お金は小用の遠い性たちで、寒い晩でも十二時過ぎに手水に行つて寝ると、夜の明けるまで行かずに済みますのである。お金はぼんやりして、広間の真中に吊るしてある電灯を見ていた。女中達は皆ね好く寐ねている様子で、所々で齒はぎしりの音がする。

その晩は雪の夜であつた。寝る前に手水に行つた時には綿をち

ぎつたような、大きい雪が盛んに降つて、手水鉢ちようずばちの向うの南天と竹柏なぎの木とにだいぶ積つて、竹柏の木の方は飲み過ぎたお客のようによろけて倒れそうになっていた。お金はまだ降っているかしらと思つて、耳を澄まして聞いているが、折々風がごうと鳴つて、庭木の枝に積もつた雪のなだれ落ちる音らしい音がする外には、只方々の戸がことごと震うように鳴るばかりで、まだ降っているのだか、もう歇やんでいるのだか分からない。

暫くすると、お金の右隣に寝ている女中が、むっくり銀杏返いちようがえしの頭を擡もたげて、お金と目を見合わせた。お松と云つて、瘦やせた、色の浅黒い、気丈な女で、年は十九だと云っているが、その頃二十五になつていたお金が、自分より精々二つ位しか若くはないと

思っていたと云うのである。

「あら。お金さん。目が醒めているの。わたしだ**いぶ**寐たようだわ。もう何時。」

「そうさね。わたしも目が醒めてから、まだ時計は聞かないが、二時頃だろうと思うわ。」

「そうでしようねえ。わたし一時間は慥かに寐たようだから。寝る前程寒かないことね。」

「宵のうち寒かったのは、雪が降り出す前だったからだよ。降っている間は寒かないのさ。」

「そうかしら。どれ**はばか**憚りに行つて来よう。お金さん付き合わなくて。」

「寒くないと云ったって、矢つ張寝ている方が勝手だわ。」

「友達が甲斐いのない人ね。そんなら為方しかたがないから一人で行くわ。」

お松は夜着の中から滑り出て、鬆ゆるんだ細帯を締め直しながら、梯子はしご段の方へ歩き出した。二階の上がり口は長方形の間の、お松やお金の寝ている方角と反対の方角に附いているので、二列に頭を衝き合せて寝ている大勢の間を、お松は通って行かなくてはならない。

お松が電灯の下がっている下の処まで歩いて行つたとき、風がごとくと鳴って、だだだあと云う音がした。雪のなだれ落ちた音である。多分庭の真ん中の立石たていしの傍そばにある大きい松の木の雪が落ちたのだろう。お松は覚えちよつとず一寸立ち留まつた。

この時突然お松の立っている処と、上がり口との中途あたりで、「お松さん、待って頂戴、一しよに行くから」と叫ぶように云つた女中がある。

そう云う声と共に、むっくり島田しまだまげ髻を擡げたのは、新参のお花と云う、色の白い、髪ちぢのれた、おかめのような顔の、十六七の娘である。

「来るなら、早くおし。」お松は寝巻の前を掻き合せながら一足進んで、お花の方へ向いた。

「わたしこわいから我慢しようかと思つていたんだけど、お松さんと一しよなら、矢つ張行つた方が好いわ。」こう云いながら、お花は半身起き上がって、ぐずぐずしている。

「早くおしよ。何をしているの。」

「わたし脱いで寝た足袋を穿はいているの。」

「じれつたいねえ。」お松は足踏をした。

「もう穿けてよ。勘辨して頂戴、ね。」お花はしどけない風をして、お松に附いて梯子を降りて行った。

便所は女中達の寝る二階からは、生あいにく憎遠い処にある。梯子を降りてから、長い、狭い廊下を通つて行く。その行き留まりにあるのである。廊下の横手には、お客を通す八畳の間が両側に二つずつ並んでいてそのはずれの処と便所との間が、右の方は女竹めだけが二三十本立っている下に、小さい石燈籠いしどうろうの据えてある小庭になつていて、左の方に茶室まが賽まがいの四畳半があるのである。

いつも夜なかに小用に行く女中は、竹のさらさらと摩れ合すう音をこわがったり、花崗石みかげいしの石燈籠を、白い着物を着た人がしがやがんでいるように見えると云つてこわがったりする。或る時又用を足している間じゆう、四畳半の中で、女の泣いている声があったので、帰りに障子を開けて見たが、人はいなかつたと云つたものがある。これは友達をこわがらせるために、造り事を言つたのであるが、その話を聞いてからは、便所の往ゆき返りに、とかく四畳半が気になつてならないのである。殊に可笑しいのは、その造り事を言つた本人が、それを言つてからは四畳半がこわくなつて、とうとう一度は四畳半の中で、本当に泣声なみこゑがしたように思つて、便所の帰りに大声を出して人を呼んだことがあつたのである。

*

*

*

お金は二人が小用に立った跡で、今まで気の附かなかつた事が附いた。それはお花の空床あきどこの隣が矢張空床になつていて、とであつた。二つ並んで明いているので、目立つたのである。

そして、「ああお蝶さんがまだ寝ていないが、どうしたのだらう」と思った。お花の隣の空床の主はお蝶と云つて、今年の夏田舎から初奉公に出た、十七になる娘である。お蝶は下野しもつけの結城ゆうきで機屋をして、困らずに暮しているものの一人娘であるが、婿を嫌つて逃げ出して来たと言ふことであつた。間もなく親元から連

れ戻しに親類が出たが、強情を張って帰らない。親類も川楸の店が、料理店ではあつても、堅い店だと云うことを呑み込んで、とうとう娘の身の上をこの内のお上さんに頼んで置いて帰ってしまった。それが帰ると、又間もなく親類だと云つて、お蝶を尋ねて来た男がある。十八九ばかりの書生風の男で、浴帷子ゆかたに小倉袴こくらばかまを穿いて、麦藁帽子むぎわらを被つて来たのを、女中達が覗いて見て、高麗蔵こまぞうのした「魔風恋風」まかせの東吾とうごに似た書生さんだと云つて騒いだ。それから寄つてたかつてお蝶を揶揄つたところが、おとなしいことはおとなしくても、意気地のある、張りの強いお蝶は、佐野と云うその書生さんの身の上を、さつぱりと友達に打ち明けた。佐野さんは親が坊さんにすると云つて、例の殺生石せつしようせきの伝説で

名高い、源翁げんおう禅師を開基としている安穩寺あんおんじに預けて置くと、お蝶が見初みそめて、いろいろにして近附いて、最初は容易に聴かなかつたのを納得させた。婿を嫌つたのは、佐野さんがあるからの事であつた。安穩寺の住職は東京で新しい教育を受けた、物分りの好い人なので、佐野さんの人柄を見て、うるさく品行を非難するような事をせず、「君は僧侶そうりよになる柄の人ではないから、今のうちに廃よし給え」と云つて、寺を何がなしに逐おい出してしまつた。そこで佐野さんは、内情を知らない親達が、住職の難癖を附けずに出家を止めるのを聞いて、げにもと思うらしいのに勢を得て、お蝶より先きに東京に出て、或る私立学校に這入はいつた。お蝶が東京に出たのは、佐野さんの跡を慕つて来たのであつた。

佐野さんはその後も、度々川柵へお蝶に逢いに来て、一寸話しては帰って行く。お客になって来たことはない。お蝶の親元からも度々人が出て来る。婿取の話が矢張続いているらしい。婿は機屋と取引上の関係のある男で、それをことわつては、機屋で困るような事情があるらしい。佐野さんは、初めはお蝶をなだめ賺す^{すか}ようにしてあしらっている様子であつたが、段々深くお蝶に同情して来て、後にはお蝶と一しよになつて、機屋一家に対してどうしようか、こうしようかと相談をする立場になつたらしい。

こう云う入り組んだ事情のある女を、そのまま使っていると云うことは、川柵ではこれまでついぞなかつた。それを目をねむつて使っているには、わけがある。一つはお蝶がひどくお上さんの

気に入っている為めである。田舎から出た娘のようではなく、何事にも好く気が附いて、好く立ち働くので、お蝶はお客の褒めものになっている。国から来た親類には、随分やかましい事を言われる様子で、お蝶はいつも神妙に俯向うつむいて話を聞いていても、その人を帰した跡では、直ぐ何事もなかったように弾力を回復して、元気よく立ち働く。そしてその口の周囲には微笑の影さえ漂っている。一体お蝶は主人に間違ったことで小言を言われても、友達に意地悪くいじめられても、その時は困ったような様子で、謹んで聞いているが、直ぐ跡で機嫌を直して働く。そして例の微笑ほほえんでいる。それが決して人を馬鹿にしたような微笑ではない。伶俐れいりで何もかも分かつて、それで堪忍して、おこるの怨むのと云うこ

とはしないと云う微笑である。「あの、笑靨えくぼよりは、口の端はたの処
に、豎たてにちよいとした皺しわが寄つて、それが本当に可哀うございま
したの」と、お金が云つた。僕はその時リオナルドオ・ダア・中
ンチのかいたモンナ・リザの画を思い出した。お客に褒められ、
友達の折合も好い、愛あい敬きようのあるお蝶が、この内のお上さんに
気に入っているのは無理もない。

今一つ川柳でお蝶に非難を言うことの出来ないわけがある。そ
れは外の女中がいろいろの口実くちじを拵こしらへて暇を貰うのに、お蝶は一
晩も外泊をしないばかりでなく、昼間も休んだことがない。佐野
さんが来るのを傍輩がかれこれ云つても、これも生帳面きちようめんに素すばな
話しをして帰るに極まっている。どんな約束をしているか、どう

云う中か分からないが、みだらな振舞をしないから、不行跡だと云うことは出来ない。これもお蝶の信用を固うする本になっているのである。

お金は宵に大分遅くなつてから、佐野さんが来たのを知っている。外の女中も知っている。こんな事はこれまでもあつたが、女中達が先きに寝て、暫く立つてから目が醒めて見れば、いつもお蝶はちゃんと来て寝ていたのである。それが今夜は二時を過ぎたかと思うのに、まだ床に戻っていない。何と云う理由わけもなく、お金はそれが直ぐに気になつた。どうも色になつている二人が逢つて話をしているのだと云う感じではなくて、何か変つた事でもありはしないかと氣遣われるような感じがしたのである。

* * *

お花はお松の跡に附いて、「お松さん、そんなに急がないで下さいよ」と云いながら、一しよに梯子段を降りて、例の狭い、長い廊下に掛かった。

二階から差している明りは廊下へ曲る角までしか届かない。それから先きは便所の前に、一燭しよくばかりの電灯が一つ附いているだけである。それが遠い、遠い向うにちよんぼり見えていて、却かえつてそれが見えるために、途中の暗黒が暗黒として感ぜられるようである。心理学者が「闇その物が見える」と云う場合に似た感じだ

ある。

「こわいわねえ」と、お花は自分の足の指が、先きに立つて歩いているお松の踵かかとに障るように、食つ附いて歩きながら云った。

「笑談じょうだん お言いでない。」お松も実は余り心丈夫でもなかつたが、半分は意地で強そうな返事をした。

二階では稀まれに一しきり強い風が吹き渡る時、その音が聞えるばかりであつたが、下に降りて見ると、その間にも絶えず庭の木立の戦そよぐ音や、どこかの開き戸の蝶ちようつがい番の弛ゆるんだのが、風にあおられて鳴る音がする。その間に一種特別な、ひゆうひゆうと、微かすかに長く引くような音がする。どこかの戸の隙間から風が吹き込む音でもあるだろうか。その断えては続く工合が、譬たとえば人が

ゆっくり息をするようである。

「お松さん。ちよいとお待ちよ。」お花はお松の袖を控えて、自分足止めした。

「なんだねえ。出し抜けに袖にぶら下がるのだもの。わたしびつくりしたわ。」お松もこうは云ったが、足を止めた。

「あの、ひゆうひゆうと云うのはなんででしょう。」

「そうさねえ。梯子を降りた時から聞えてるわねえ。どこかここらの隙間から風が吹き込むのだわ。」

二人は暫く耳をそばだ敬そてて聞いていた。そしてお松がこう云った。

「なんでもあんまり遠いところじゃなくってよ。それに板の隙間で、あんな音はしまいと思うわ。なんでも障子の紙かなんかの破

れた処から吹き込むようだねえ。あの手水場ちようずばの高い処にある小窓の障子かも知れないわ。表の手水場のは硝子戸ガラスだけれども、裏のは紙障子だわね。」

「そうでしょうか。いやあねえ。わたしもう手水なんか我慢して、二階へ帰って寝ようかしら。」

「馬鹿な事をお言いでない。わたしそんなお附合いなんか御免だわ。帰りたけりやあ、花ちゃんひとりでお帰り。」

「ひとりではこわいから、そんなら一しよに行つてよ。」

二人は又歩き出した。一足歩くごとに、ひゅうひゅうと云う音が心持近くなるようである。障子の穴に当たる風の音だろうとは、二人共思っているが、なんとなく変な音だと云う感じが底にあつ

て、それがいつまでも消えない。

お花は息を屏めてお松の跡に附いて歩いているが、頭に血が昇つて、自分の耳の中でいろいろな音がする。それでいて、ひゅうひゅうと云う音だけは矢張際立つて聞えるのである。お松も余り好い気持はしない。お花が陽にお松を力にしているように、お松も陰にはお花を力にしているのである。

便所が段々近くなって、電灯の小さい明りの照し出す範囲が段々広くなって来るのがせめてもの頼みである。

二人はとうとう四畳半の処まで来た。右手の壁は腰の辺から硝子戸になっているので、はじめ始て外が見えた。石灯籠の笠には雪が五六寸もあろうかと思う程積もっていて、竹は何本か雪にたわ撓んで地

に着きそうになっている。今立っている竹は雪が墮ちた跡で、はね上がったのであろう。雪はもう降っていないかった。

二人は覚えぬ足を止めて、硝子戸の外を見て、それから顔を見合わせた。二人共相手の顔がひどく青いと思つた。電灯が小さいので、雪明りに負けているからである。

ひゆうひゆうと云う音は、この時これまでになく近く聞えている。

「それ御覧なさい。あの音は手水場でしているのだわ。」お松はこう云つたが、自分の声が不断と變つているのに気が附いて、それと同時にぞつと寒けがした。

お花はこわくて物が言えないのか、黙つて合がつてん点々々をした。

二人は急いで用を足してしまった。そして前に便所に這入る前に立ち留まった処へ出て来ると、お松が又立ち留まって、こう云った。

「手水場の障子は破れていなかっただのねえ。」

「そう。わたし見なかつたわ。それどこじゃないのですもの。さあ、こんなとこにいないで、早く行きましょう。」お花の声は震えている。

「まあ、ちよいとお待ちよ。どうも変だわ。あの音をお聞き。手水場の中よりか、矢つ張ここの方が近く聞えるわ。わたしきつとこの四畳半の障子だと思うの。ちよつと開けて見ようじゃないか。」お松はこん度常の声が出たので、自分ながら気強く思った。

「あら。およしなさいよ。」お花は慌あわてて、又お松の袖にしがみ附いた。

お松は袖を攫つかまえられながら、じつと耳を澄まして聞いている。直そき傍そばのように聞えるかと思うと、又そうでないようにもある。慥たしかに四畳半の中だと思われる時もあるが、又どうかすると便所の方角のようにも聞える。どうも聞き定めることが出来ない。

僕にお金が話す時、「どうしても方角がしつかり分からなかつたと云うのが不思議じゃありませんか」と云つたが、僕は格別不思議にも思わない。聴くと云うことは空間的感觉ではないからである。それを強しいて空間的感觉にしようと思うと、ミュンステルベルヒのように内耳の迷路で方角を聞き定めるなど云う無理な

議論も出るのである。

お松は少し依怙地えこじになつたのと、内々はお花のいるのを力にしているのので、表面だけは強そうに見せている。

「わたし開けてよ」と云いさま、攫まえられた袖を払って、障子をさつと開けた。

廊下の硝子障子から差し込む雪明りで、微かではあるが、薄暗い廊下に慣れた目には、何もかも輪郭だけはつきり知れる。一室内を見込むや否や、お松もお花も一しよに声を立てた。

お花はそのまま氣絶したのを、お松は棄てて置いて、廊下をばたばたと母屋おもやの方へ駈け出した。

*

*

*

川柵の内では一人も残らず起きて、廊下の隅々の電灯まで附けて、主人と隠居とが大勢のもの騒ぐのを制しながら、四畳半に来て見た。直ぐに使を出したので、医師が来る。巡査が来る。続いて刑事係が来る。警察署長が来る。気絶しているお花を隣の明あ間きまへ抱えて行く。狭い、長い廊下に人が押し合つて、がやがやとののし罵る。非常な混雑であつた。

四畳半には鋭利な刃物で、気管を横に切られたお蝶が、まだ息が絶えずに倒れていた。ひゆうひゆうと云うのは、切られた気管の疵きずぐち口から呼吸をする音であつた。お蝶の傍そばには、佐野さんが

自分の頸くびを深くえぐった、白鞆しろらやの短刀の柄つかを握にぎつて死んでいた。
頸動脈けいどうみやくが断きたれて、血ちが夥おびただしく出でている。火鉢ひばちの火には灰かが
掛けて埋うずめてある。電灯には血の痕あとが附ついている。佐野さんがお
蝶のどの吭のどを切きつてから、明りを消けして置いて、自分が死んだのだら
うと、刑事係が云いつた。佐野さんの手で書いて連署した遺書が床
の間に置いてあつて、その上に佐野さんの銀時計が文鎮ぶんぢんにしてあ
つた。お蝶の名だけはお蝶おとが自筆じひつで書かいている。文面の概略はこ
うである。「今年の暮くに機屋はたや一家は破産はさんしそうである。それはお
蝶おとが親おやの詞ことばに背そむいた為ためである。お蝶おとが死しんだら、債権者ちけんしやも過酷かこ
な手段しゅんは取るまい。佐野も東京には出でて見たが、神経衰弱しんけいの為ため
に、学業がくぎやうの成績せいせきは面白おもしろくなく、それに親戚しんせきから長く学費がくぎを給たまして

くれる見込みもないから、お蝶が切に願うに任せて、自分は甘んじて犠牲になる。」書いてある事は、ざっとこんな筋であつたそうだ。

川楸へ行く客には、お金が一人も残さず話すのだから、この話を知っている人は世間に沢山あるだろう。事によると、もう何かに書いて出した人があるかも知れない。

青空文庫情報

底本：「森鷗外集 新潮日本文学」 新潮社

1971（昭和46）年8月12日発行

入力：柿澤早苗

校正：湯地光弘

1999年10月16日公開

2006年4月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

心中 森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>